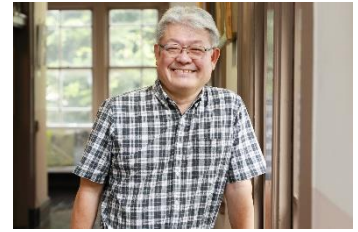


## 理事長エッセイ

### 隻眼須憑自主張

(せきがん すべからく みずからの  
しゅちょうに よるべし)



公益社団法人 日本畜産学会 理事長 小澤 壯行

さきで開催された機関誌編集委員会の場において、本号より学会報に当方のエッセイを掲載することが許されました。いまだかつてない試みではありますが、畜産学会がどのような状況にあるのか、また理事会が何を目指しているのか、さらに学会が向かうべき方向性とは何なのかを私見を交えてご報告したいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

さて今回の表題「隻眼須憑自主張」ですが、これは私の恩師である梶井功先生（東京農工大学学長、日本農学賞受賞）の随筆集のタイトルをそのまま援用しました。梶井先生は農業経済・経営学者としてご活躍され、耕種農業はもとより畜産経営に関して大変造詣が深くいらっしゃいました。今回引用した原文は、清の時代に活躍した趙翼(1727~1814)という人の詩で、「論詩二首」と題されています。

李杜文章万口伝 至今己覚不新鮮  
江山代有才人出 各領風騷数百年  
隻眼須憑自主張 紛紛芸苑節雌黄  
矮人看戲何曾見 都是随人説短長

その詩の内容としては「李白や杜甫の詩文を皆もてはやすけれど、もう新鮮とはいいいかねる。考えてみると李白や杜甫以外にも時代の精神を謳ったすぐれた詩人はたくさんいるじゃないか。詩人は、自分の主張をもつことが何よりも大事なのに、“芸苑”ではつまらん揚げ足取りばかりやっているし、自分の目で見ることがせず、人の尻馬に乗って短長をあげつらっている輩がおおい」というような意味だそうです（詳細は岩波文庫「中国名詩選」をご覧ください）。

隻眼とは詩人そのものを表しています。梶井先生は学問とその在り方に対する自らの信念と心意を示されるとともに、深化・複雑化する日本農業の危機の克服、解決のために本格的な「研究・論争よ起これ！」と同学の後進である私たちに熱望されていたのでしょう。じつはこの言葉は私の座右の銘でもあります。畜産学の「隻眼」でもある私たちは研究というツールによって「自らの主張」に拠らなくてはならないのです。実に研究者のあるべき姿を投影した言葉であると思います。

それでは私たちの学会は何をめざすべきでしょうか？新しい時代の「隻眼集団」として取り組むべき課題とは何でしょうか？

私は前号の所信表明で産業界との交流を密にすることにより、「産学の一体化」を目指すことを述べました。このことを踏まえて本年9月に帯広畜産大学で開催した理事懇談会では「外部理事制度の導入」について提案し、同意を得ることができました。

この背景にはそもそも本法人設立目的として定款に、「畜産に関する学術研究の発表、情報の交換の場としてその進歩普及を図り、もって学術、文化の発展に寄与する」と掲げられているにもかかわらず、学会活動として「学術発展」への寄与は大いにあるものの、「文化」すなわち広義の畜産業界そのものへの発展に学会が貢献しているとは必ずしも言い難い状況があります。

とりわけウクライナ紛争ならびに円安為替誘導に端を発した、いわゆる「畜産危機」に対して本法人がその機能を十全に果たすことができなかつたことはとても遺憾なことであり、加えて畜産関係業界団体の、本学会に対する「期待」は無きに等しく、学会としての声明（ステートメント）発信すら成し遂げることすらできなかつたことがあげられます。

そこで正会員以外の畜産業界から、「外部理事」を学会運営に導入することにより、新たな歩むべき方向性が見つけられるものと信じます。さらに懇談会の場では「学会の広報に関する仕組みおよびプレスリリースの方法」についても資料をもとに報告がありました。学会からのステートメント発出するにあたって、各種の障壁が山積していることを学びました。これらの点については次2024年1月末に開催する次回理事会での議論に向かって、具体的な手法を検討することとしました。

2024年に創立100周年を迎える私たちの学会は、なにごとにも「自らの主張による」べき方向性を見出し、遂行することに傾注します。どうか会員各位のご協力を切にお願い申し上げます。なお今後の進捗についてもその都度、本紙面を通じてご報告いたします。ご期待ください。